

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 2291 号

Emergency code to prevent unexpected cardiac arrests: single center retrospective study

院内心停止の分析および予後予測因子の検討

伊藤 櫻子 (いとう さくらこ)

博士 (医学)

論文内容の要旨

院外心肺停止症例の蘇生率は様々な取り組みにより向上してきたが、院内発症の心停止は予後不良である。近年では未然に心停止を防ぐ取り組みとして、患者の状態が重症化する前に対応する RRS (rapid response system) が注目され、順天堂大学医学部附属練馬病院でも 2014 年から導入された。院内心停止の症例を減らし予後を改善するために、急変患者について分析し、予後予測因子を検討した。

2008 年 4 月 1 日から 2020 年 3 月 31 日の間の緊急コール (救急コールおよび RRS) が要請された患者 667 例を対象とした。調査項目としては緊急コールの件数の推移、発生場所、時間帯、通報者の職種、転帰、患者の背景、要請時の状況とした。

院内心停止の発生率は入院 1000 件あたり 0.86 件であり、自己心拍再開は 75 例 (58%)、生存退院は 21 例 (16%) だった。院内心停止 129 例のうち 85 例 (77.5%) は目撃なく発見された。日中の発症が多く、救命率も高い傾向にあった。除細動適応の心電図波形、心停止前に意識清明であることが予後良好な因子だった ($P < 0.001$, $P = 0.001$)。また呼吸数の測定は全体の 54 例 (41%) に留まった。

緊急コールと RRS を整備したが生存退院率は低かった。意識状態や呼吸数を含めたバイタルサインの観察を適切に行うことが、予後改善に繋がる可能性がある。